オホーツクの農業2020

Agriculture in Okhotsk

（目　次）

Ⅰ　オホーツクの概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　オホーツクの農業の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

Ⅲ　農業構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

Ⅳ　農業の担い手　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

Ⅴ　農産　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

Ⅵ　酪農・畜産　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21

Ⅶ　食の安全・安心、付加価値向上　・・・・・・・・・・・・　24

Ⅷ　加工　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　27

Ⅸ　農業農村整備事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　31

Ⅹ　農業関係機関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　33

ⅩⅠ　農業関係団体　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　35

ⅩⅡ　オホーツク総合振興局農業関係部署の概要　・・・・・　37

トピックス　～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

①【農作業安全に向けた取組】　～農作業安全フォーラム～・・・・・・・・・・・・　7

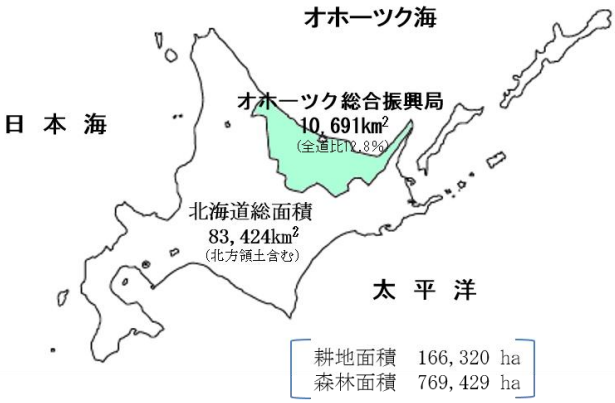
②【牛乳乳製品の消費拡大の取組】～牛乳チャレンジ！＆ミルクスタンプラリー～・・・　30

Ⅰ　オホーツクの概要

１　位　　置

オホーツク地域（オホーツク総合振興局管内）は、北海道の北東部に位置し、オホーツク海と 280km の海岸線で接しており、南北に約 80km、東西に約 200km の広がりがあります。総面積は 10,691km²(秋田県に匹敵)と全道の 12.8%を占め、宗谷・上川・十勝・釧路・根室の各総合振興局・振興局と境界を接しています。

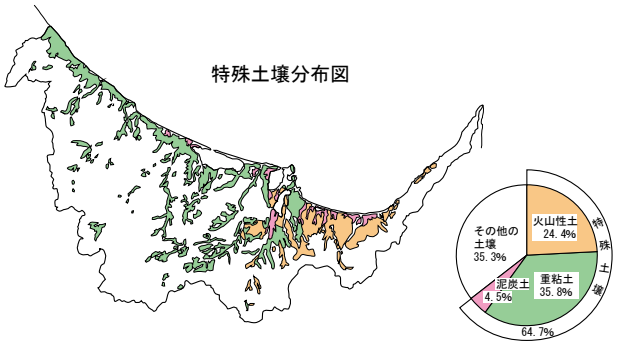
管内は、比較的なだらかな起伏に富み、オホーツク海岸部から南西及び南東に向かって標高が段階的に上昇しています。オホーツク海沿岸部には平地が多く、海岸から平行して低地・台地・丘陵地・山地という基本的な配列となっています。



２　土　　壌

管内は、道内で最も多様な農地の土壌種類が分布している地域であり、特殊土壌と呼ばれる泥炭土、火山性土及び重粘土が大半を占めています。

これらの特殊土壌は冷涼な気候とともに作付作物を制限し、生産性を低下させる大きな要因となってきましたが、主に戦後になってからは、客土*1、暗渠排水*2、土壌改良資材の投入*3 等、農地を改良する努力が続けられ、その結果、近年では、まだまだ改良の余地があるものの他の地域に劣らない生産性の高い農業が営まれています。地域別に見ると、網走・北見・置戸を結ぶ線の西側が重粘土地帯、東側が火山性土地帯に大別され、地下水位が高い低地に泥炭土が散在している形態となっています。

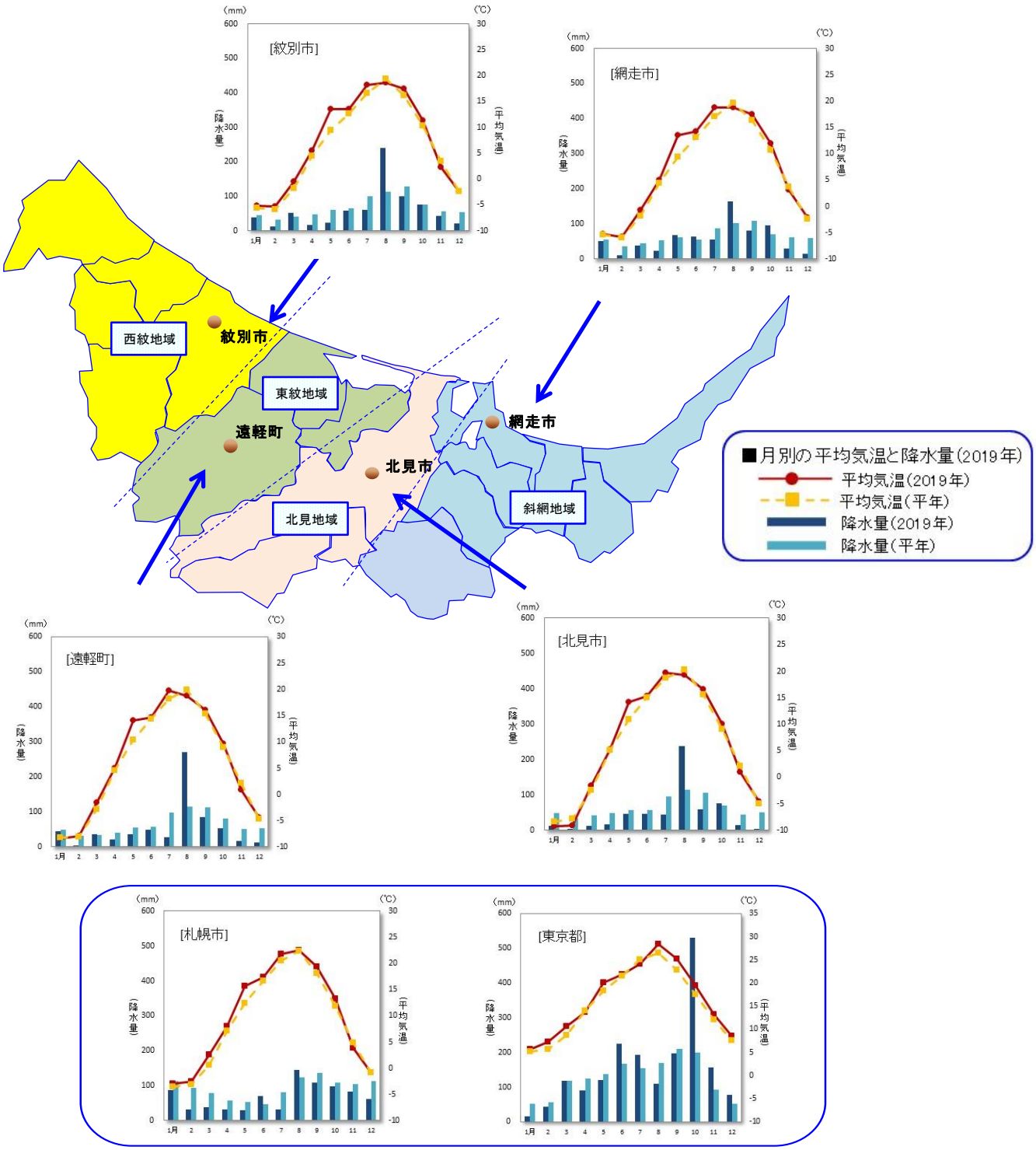


客土*1 ……性質の異なる土を混入することで作土の物理性が改善され、収穫量の増加、品質の向上、新規作物の作付けなどが可能になります。
暗渠排水*2 ……水はけが悪く湿害を受けやすい農地に排水管を埋め排水性を改善します。
土壌改良資材の投入*3 …土壌の物理性、化学性、生物性の改善を目的に、土壌改良資材（酸性矯正材、リン酸資材、有機質資材等）を投入します。

３　気　　象

管内の平均気温は５～６度で、道内では宗谷、根室地方に次いで低くなっていますが、農耕期間の気温は 15～16 度とこれらの地域より高く、畑作を中心とした低温に適応する農作物の生産が可能で、積算気温が比較的高い内陸部では、稲作が営まれているところもあります。しかし、気象の変動が大きく、オホーツク海高気圧の出現などによって極端な低温や日照不足による度々の冷害、遅霜（平年終霜５月 10 日前後・平年初霜 10 月 20 日前後)、また春先の強い南西風による風害など、農業にとって厳しい気象条件下にあります。年間の降水量は、600～800 ㎜で、全道で最も少ない地域となっており、積雪量は 70 ㎝前後で全道的に少ない地域となっています。

令和元年は平年と比べて融雪がやや早く進み、４月に入ってからも好天の日が多かったため、てん菜の移植や馬鈴しょの植付作業は平年より早く進みました。５月中旬に一部の地域で強風が発生し、主にてん菜の生育に影響が生じましたが、再移植や補植、再播種などの対策が速やかに実施されたことに加え、その後の適度な降雨にも恵まれ、生育は概ね順調に回復しました。６月から７月にかけては、好天に恵まれ、いずれの作物の生育も平年より早く推移し、８月は低温・多雨・寡照により生育は緩慢となったものの、９月から 10 月にかけては好天に恵まれ、収穫作業は平年並かやや早く終了しました。収量については、小麦、玉ねぎ、てん菜は平年を上回り、馬鈴しょは平年並みとなりました。



４　人　　口

管内の人口は、昭和 35 年（1960 年）は、約 42 万５千人余りでしたが、昭和 50 年代の一時期を除いて減少が続いており、令和２年（2020 年）は約 27 万８千人と昭和 35 年の 6.5 割程度となっています。

市部と町村部に分けてみると、北見・網走・紋別の三市における人口は、約 17 万３千人と管内人口の約６割を占めます。

一方、町村部における人口は、約 10 万人となっており、中には平成 27 年（2015 年）から令和２年（2020 年）の５年間の人口減少率が 11%を超えるところもあるなど、過疎化が進行しています。

また、年齢別人口で見ると、管内の老年人口(65 歳以上人口)は 34.6%となっており、高齢化も進行しています。

Ⅱ　オホーツクの農業の概要

１　北海道農業に占めるオホーツク農業の割合

区　分（単 位）	オホーツク	北海道	対北海道比（%）	調査年次
耕地面積　(ha)	166,100	1,145,000	14.5	R1
田　(ha)	1,620	222,200	0.7	R1
畑　(ha)	164,400	922,300	17.8	R1
農家戸数　(戸)	3,958	37,594	10.5	R2
販売農家　(戸)	3,632	38,086	9.5	R2
作付面積				
水稲　(ha)	982	103,000	1.0	R1
小麦　(ha)	28,500	121,400	23.5	R1
大麦　(ha)	1,220	1,700	71.8	R1
てん菜　(ha)	22,800	56,700	40.2	R1
大豆　(ha)	2,630	39,100	6.7	R1
馬鈴しょ　(ha)	16,600	49,600	33.5	R1
たまねぎ　(ha)	7,905	14,600	54.1	R1
収穫量				
水稲　(t)	5,350	588,100	0.9	R1
小麦　(t)	191,700	677,700	28.3	R1
大麦　(t)	5,780	7,620	75.9	R1
てん菜　(t)	1,686,000	3,986,000	42.3	R1
大豆　(t)	7,320	88,400	8.3	R1
馬鈴しょ　(t)	701,300	1,890,000	37.1	R1
たまねぎ　(t)	504,720	842,400	59.9	R1
飼養頭羽数				
乳用牛　(頭)	113,137	801,000	14.1	R1
(1戸当たり)　(頭)	131.4	134.2	97.9	R1
肉用牛　(頭)	68,719	512,800	13.4	R1
(1戸当たり)　(頭)	208.9	200.3	104.3	R1
生乳生産量　(t)	578,165	4,048,197	14.3	R1

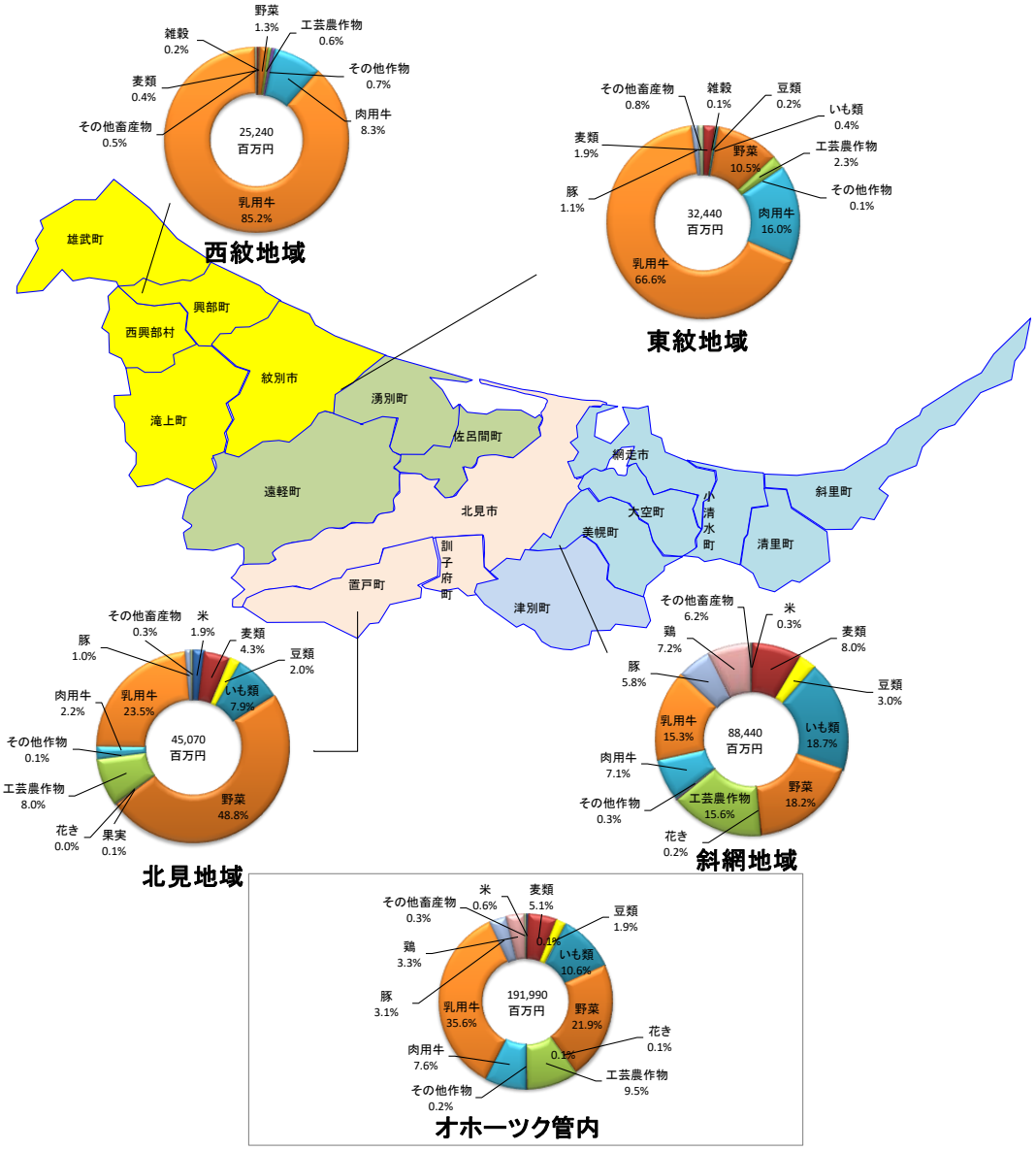
資料：農林水産省「耕地面積調査」、「作物統計調査」、「畜産統計調査」、「牛乳乳製品統計調査」
「農林業センサス」
*一部「オホーツク総合振興局調べ」

２　地域別農業の特色

管内は気象条件・土地条件などの自然的条件と経済的条件の違いによって斜網・北見・東紋・西紋の４地域に大別され、それぞれの条件を生かし、地域ごとに特色ある農業が展開されています。

斜網地域 （網走市・大空町・美幌町・津別町・斜里町・清里町・小清水町）	てん菜・馬鈴しょ・麦類を中心に機械化された大規模な畑作農業を展開する地域であり、斜網地域だけで管内農業産出額の耕種部門の59%を占めます。
北見地域 （北見市、訓子府町、置戸町）	たまねぎ等の野菜を基幹として、水稲・酪農などの生産性の高い農業を展開する地域で、特にたまねぎは全道収穫量の42%を占める大産地です。1戸当たり耕地面積は29．2haと狭いものの、10a当り農業産出額では126千円と管内トップです。
東紋地域 （佐呂間町、湧別町、遠軽町）	酪農を基幹として、たまねぎ・かぼちゃ・ブロッコリー・アスパラガス等の野菜や青しそ等の特用作物などに取り組み、工夫をこらした農業を展開する地域です。1戸当たり耕地面積は49．5haと酪農地帯としては狭く、1戸当たり農業産出額は管内平均と同程度です。
西紋地域 （紋別市、滝上町、興部町、西興部村、雄武町）	草地等の土地基盤を活用した大規模な酪農を展開しており、1戸当たり耕地面積は118．5haと管内では最も大きい地域です。農業産出額に占める畜産の割合は96%を超え、1戸当り農業産出額は9千9百万円と管内平均を大きく上回ります。

農業産出額の品目別割合（令和元年）



地域別農業統計等の比較

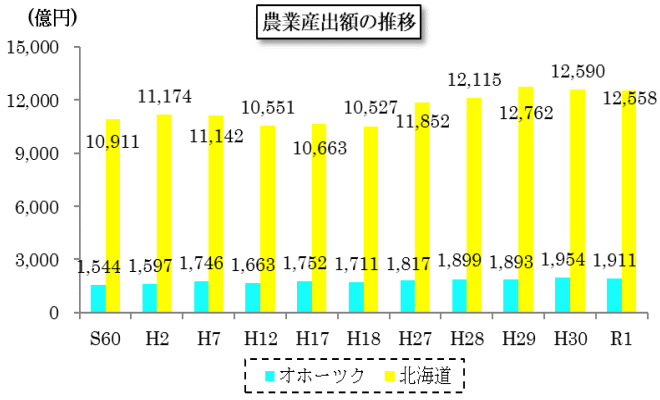
区分		オホーツク総合振興局	斜網地域	北見地域	東紋地域	西紋地域
農家戸数（R2）		3,958 戸	1,957 戸	1,220 戸	527 戸	254 戸
耕地面積（R元）		166,100 ha	74,270 ha	35,650 ha	26,090 ha	30,110 ha
１戸当たり耕地面積（参考）		42.0 ha	38.0 ha	29.2 ha	49.5 ha	118.5 ha
農業産出額（R元）		191,190 百万円	88,440 百万円	45,070 百万円	32,440 百万円	25,240 百万円
	うち畑作	51,700 百万円	39,840 百万円	9,940 百万円	1,600 百万円	320 百万円
	うち酪農	67,780 百万円	13,460 百万円	10,540 百万円	21,550 百万円	22,230 百万円
	うち野菜	41,670 百万円	15,990 百万円	21,940 百万円	3,400 百万円	340 百万円
１戸当たり農業産出額（参考）		48,305 千円	45,192 千円	36,943 千円	61,556 千円	99,370 千円
10a当たり農業産出額（参考）		115 千円	119 千円	126 千円	124 千円	84 千円

資料：農家戸数/農林水産省「農林業センサス」　耕地面積/農林水産省「耕地面積調査」
農業産出額/農林水産省「市町村別農業産出額（推計）」
１戸当たり耕地面積及び農業産出額、10ａ当たり農業産出額は上記データから算出

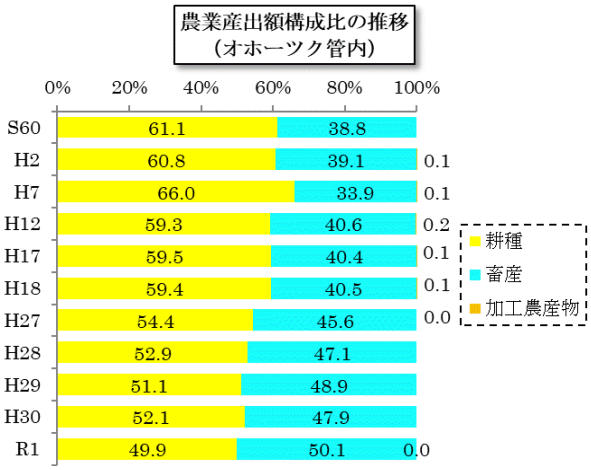
注1)：農業産出額の「うち畑作」は麦類・雑穀・豆類・いも類・工芸農作物。
注2)：ラウンドの関係で、オホーツク総合振興局と各地域の合計は必ずしも一致しない。

３　農業産出額

管内の農業産出額は、令和元年（2019 年）は 1,911 億円となりました。農業産出額の構成比は、耕種、畜産ともに約５割となり、畜産は増加傾向で推移しています。



資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「市町村別農業産出額（推計）」



資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「市町村別農業産出額（推計）」

Ⅲ　農業構造

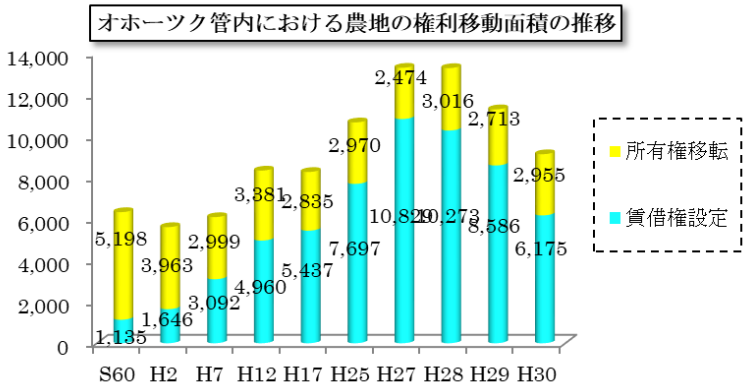
１　耕地面積

耕地面積は、北海道・管内ともに微減傾向にあります。令和２年（2020 年）の管内の耕地面積は 166,000ha となっています。

資料：農林水産省「耕地面積調査」

２　農地の権利移動

管内における耕作目的の農地の権利移動面積は、平成７年まで横ばいに推移していましたが、平成１２年度以降、農地法の改正により農地権利移動の規制が緩和されるとともに、農業経営基盤強化促進法の改正により担い手への農地利用集積に向けた措置が拡充され、平成２６年度には農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく農地中間管理事業が開始されたことにより、増加傾向で推移してきましたが、担い手への農地の集積率が高まり、平成 30 年度では権利移動が前年度に比べ減少しています。



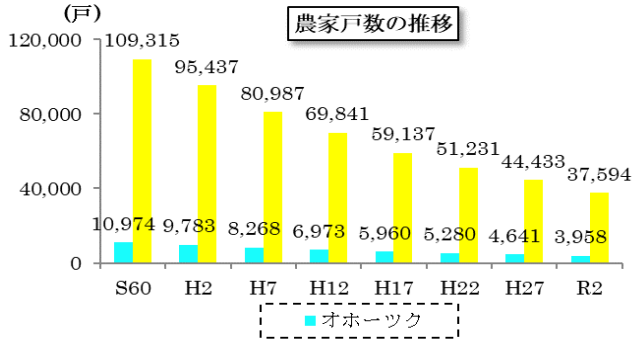
資料：農林水産省「農地の権利移動・賃借等調査」
注）農地の権利移動面積は、農地法第３条、農業経営基盤強化促進法、農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく、農地及び採草放牧地の所有権移転面積と賃貸借設定面積である。

このうち、農業経営基盤強化促進法に基づく農地の権利移動が主体となっており、平成 30 年では全体の８割近くを占めています。

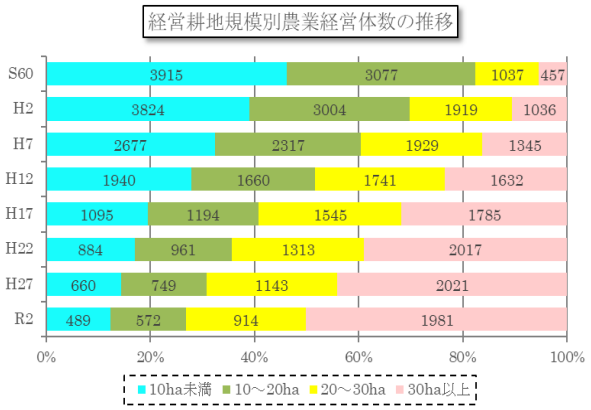
３　農家戸数

農家戸数は、北海道・管内ともに減少を続けています。

また、経営耕地面積規模別の農業経営体数の推移を見ると、30ha 以上の経営体の割合が、平成 22 年（2000 年）と比べ令和２年（2020 年）は、39%から 50%になり、経営規模の大きい農家の割合が増加しています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

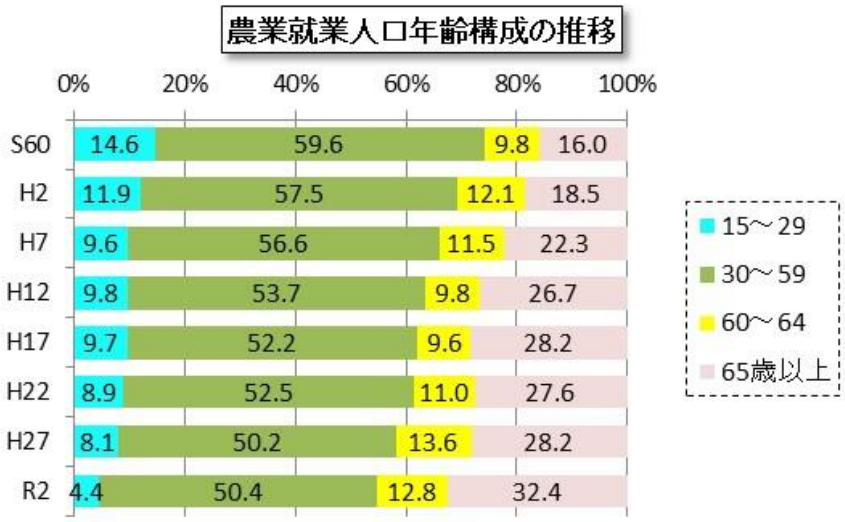


資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

４　基幹的農業従事者数

個人経営体の基幹的農業従事者数は、北海道・管内ともに減少を続けています。管内では、令和２年（2020 年）は 8,800 人となり、昭和 60 年（1985 年）の３万２千人と比べ３割以上減少しています。

また、年齢構成は 60 歳以上が昭和 60 年以降増え続けていることから、高年齢化が見られ、令和２年（2020 年）には 60 歳以上が 45.2%を占めています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

トピックス①

【農作業安全に向けた取組】　～農作業安全フォーラム～

個々の農業経営を安定して継続させていくためには、農作業安全が重要ですが、近年、オホーツク管内においても農作業事故の発生が相次いでいることから、オホーツク地区農作業安全運動推進本部（中央会北見支所、ホクレン北見支所、普及センター、振興局）では、令和２～４年度の３か年を「農作業事故ゼロ推進キャンペーン期間」と位置づけ、各産地での啓発活動の活発化を図ることとしています。

そのキックオフイベントとして、８月26日紋別市、27日網走市において「オホーツク農作業安全フォーラム」を開催しました。

フォーラムでは、農研機構の積ユニット長による農作業安全についての講演や普及センターからの情報提供、啓発資料として配付した「農作業事故ゼロ宣言カード」など、農作業安全に向けた取組の説明のほか、農業者による「オホーツク農作業事故ゼロ宣言」が行われ会場の拍手により採択されました。今後は、各地域での取組への支援を行っていく予定です。

オホーツク農作業安全フォーラム

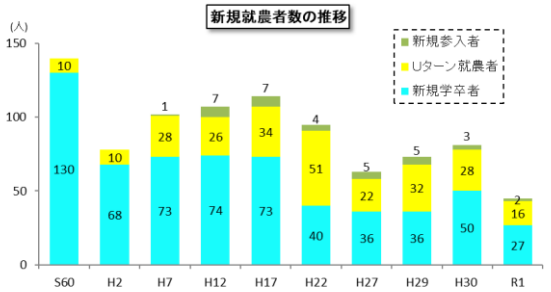
Ⅳ　農業の担い手

１　新規就農者

管内の新規就農者数は、近年、60 人程度で推移しており、令和元年は 45 人となっています。

新規就農者のうち、「新規学卒就農者」は、平成 17 年以降は減少傾向で推移し、平成 30 年に若干回復したものの令和元年には 27 人となり、前年の約半数となりました。

「Ｕターン就農者」は、平成 23 年頃まで、増加傾向（50 人前後）でしたが、平成 28 年以降は 30 人前後で落ち着いています。ただ、令和元年は 16 人となっており、前年よりも 12 人減少しています。



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ
注１）「新規学卒就農者」とは、農家出身者で学校を卒業後、直ちに就農した者
２）「Ｕターン就農者」とは、農家出身者で他の産業に従事した後に就農した者
３）「新規参入者」とは、非農家出身者で新たに農業経営を開始した者

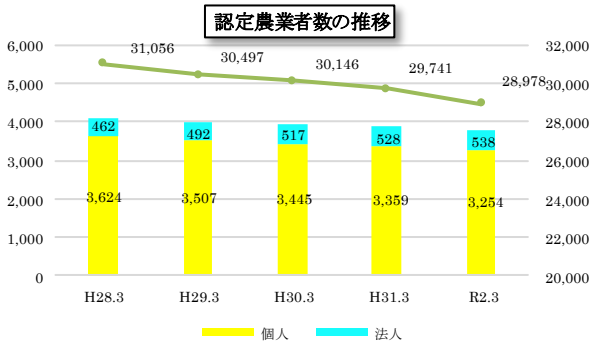
「新規参入者」は、毎年数名で推移しており、令和元年は２人となっています。

２　認定農業者

管内の認定農業者数は、令和２年３月末時点で、3,792 経営体となっています。

近年の認定農業者数は、高齢化等を背景に減少傾向で推移していますが、認定農業者のうち法人の数は、前年と比べ、10 法人増加し、538 法人と年々増加する傾向にあります。

国の農業経営に関する各種施策等は、認定農業者を主とする「担い手」に集中・重点化しています。



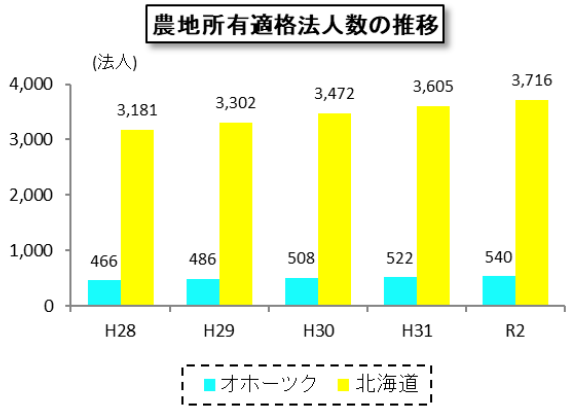
資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

３　農地所有適格法人

管内の農地所有適格法人数は、増加傾向にあり、令和２年１月１日時点で 540 法人となっています。

農業経営の法人化は、家計と経営の分離により経営管理能力や対外信用力が高まるほか、給与制、休日制及び社会保険などの整備により優れた人材を確保しやすく、規模拡大や経営の多角化が容易になるなどのメリットを有しています。

特に近年、複数戸による農地所有適格法人には、地域の中核的な担い手として離農者などの農地や農作業の引き受け手、新規就農者の受け入れとなるなど、公益的機能の発揮が期待されています。



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ（各年1月1日現在）

４　北海道指導農業士・北海道農業士

本道農業の発展と地域社会の活性化を図るため、次代の農業の担い手の受入・指導や地域農業の振興に対する助言・協力を行う優れた農業者を「北海道指導農業士」として、地域農業の振興等に積極的に参加協力を行う農業者を「北海道農業士」として、それぞれ市町村長の推薦を受けて知事が認定しています。

管内では、令和２年 12 月末現在で、指導農業士 113 名、農業士 218 名が認定されています。

５　農村女性グループ

管内では、簿記や経営管理の学習、農畜産物の直売や加工など、幅広い農村女性のグループ活動（令和２年３月現在、39 グループ）が行われており、農業経営の改善をはじめ、消費者との交流や食文化の伝承など農業・農村への理解促進に貢献しています。

また、平成 13 年には、各グループの交流を目的としたオホーツク農村女性ネットワーク「kirari ウエルカム」が設立され、交流と学習の場である「農村女性のひろば」の開催など活動の輪が広がっています。

６　青年農業者クラブ

20 代～30 代前半を中心とした青年により構成される青年農業者クラブ（令和２年 12 月現在、16 クラブ）は、交流会や学習会等の活動を通じて、農業経営・技術の向上や仲間づくりなどの自己研鑽のほか、地域農家への新技術の提案、子どもの農業体験指導にも取り組むなど、次代の担い手育成の場となっています。

７　地域農業支援システム

経営の規模拡大に伴う過重労働、担い手の減少、農作業従事者の高齢化などに対応し、労働負担を軽減するため、酪農を中心に農作業受託組織(コントラクター)やＴＭＲセンター、酪農ヘルパー組合などの農作業支援組織整備が進められています。

（１）コントラクター（農作業受託組織）

令和元年に管内で活動しているコントラクターは 14 組織あり、農業協同組合や株式会社、農事組合法人、営農集団など多様な形態で運営されています。

また、コントラクターでは、牧草や飼料用とうもろこしの収穫をはじめ、堆肥の切り返し・散布・耕起作業、心土破砕、草地更新作業など様々な農作業を請け負い、委託農家の労働力負担の軽減を図っています。

（２）ＴＭＲセンター

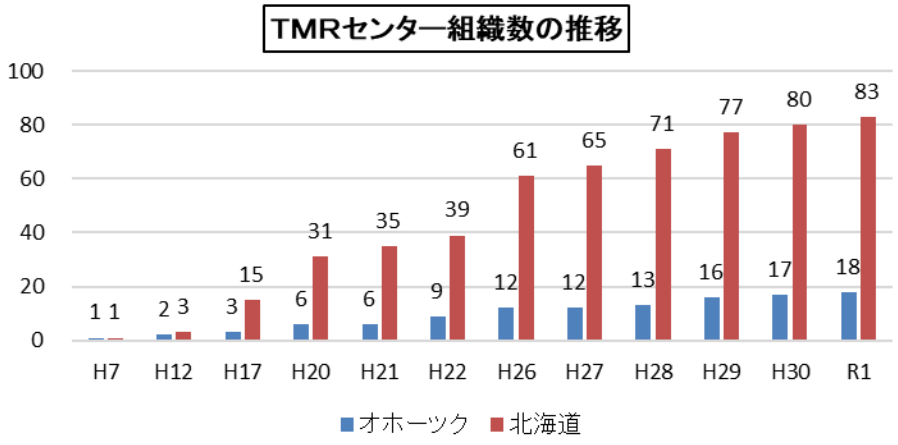
TMR センターは、酪農経営の規模拡大に伴い、飼料生産を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、飼料生産から TMR の調整・供給までを行う組織で、良質粗飼料の安定的な確保を図り、構成する酪農家の経営改善を図ることを主な目的としています。

管内には令和２年３月現在、18 組織が設立されており、近年増加傾向にあります。

TMR センターの利用により、飼料の収穫・調製・給与に係る時間の短縮、良質なＴＭＲの供給による１頭当たり乳量の増加など、一定の成果を上げています。

■管内ＴＭＲセンター一覧

ＴＭＲセンター名	開始年	市町村
(有)オコッペフィードサービス	平成 11 年	興部町
(農)東もことＴＭＲセンター	平成 15 年	大空町
(有)アグリサポートばろう	平成 18 年	湧別町
(同)Ｋ’ｓフィードサービス	平成 19 年	訓子府町
(株)西興部グラスフィードファクトリー	平成 19 年	西興部村
(同)雄勝フィードサービス	平成 22 年	置戸町
佐呂間町農業協同組合	平成 22 年	佐呂間町
(同)秋里ＴＭＲセンター	平成 22 年	興部町
(株)ドリームゆうべつ	平成 23 年	湧別町
(株)こしみずエコフィードサービス	平成 24 年	小清水町
(有)だいち	平成 25 年	津別町
(農)瑞穂	平成 27 年	北見市
(同)ほっくんフィードセンター	平成 27 年	訓子府町
(株)オホーツクＴＭＲセンター	平成 27 年	興部町
(同)Dream Feed Kitami	平成 29 年	北見市
(同)温根湯サイレージサービス	平成 29 年	北見市
(同)上置戸フィードサービス	平成 30 年	置戸町
Ｕ２デーリィコンシェル(株)	平成 30 年	興部町



資料:オホーツク総合振興局農務課調べ

（３）酪農ヘルパー利用組合

酪農ヘルパー利用組合は、酪農経営の厳しい労働条件を緩和し、定期的に休日を確保したり、病気・事故の際に、酪農家に代わって搾乳などの飼養管理を行うヘルパーを派遣する組織です。

管内では全市町村で 16 組合が組織され、利用組合参加率は 94.5％となっています。

また、1 戸あたり年間利用日数は 26.6 日と、前年に比べ 2.9 日増加しています。

■酪農ヘルパー事業の実施状況（平成 30 年度）

	組合数	専任ヘルパー数（人）	加入農家戸数（戸）	加入率（％）	１戸当たり年間利用日数
オホーツク総合振興局	16	92	740	94.5％	26.6
北海道	86	498	5,000	91.4％	23.2

資料：（社）酪農ヘルパー全国協会調べ

（４）哺育・育成センター

哺育・育成センターは、酪農経営の規模拡大に伴い、哺育・育成部門を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、哺育・育成業務を行う組織で、構成する酪農家の労働負担軽減を図ることを主な目的としています。

管内では個人での哺育・育成受入経営体も合わせて、8 か所で組織されています。

■哺育・育成センター設置状況（令和元年度）

区　　分	哺育・育成受託箇所数	利用戸数（戸）	頭数規模（頭）
オホーツク総合振興局	8	109	3,081
北海道	82	949	32,315

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

Ⅴ　農　産

１　稲　作

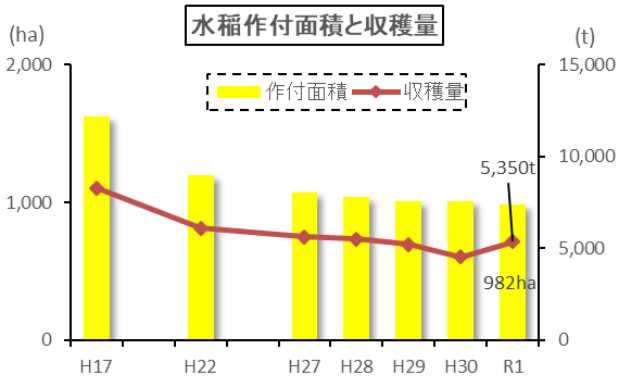
オホーツク地域は、水稲生育上、厳しい気象条件であることから、他作物への転換が進み、水稲の作付面積は減少傾向が続いている一方で、冷涼な気候を活かしたもち米の産地が形成されています。

オホーツク管内の令和元年産の水稲作付面積は982ha と、前年から約 20ha 減少しました。生育は、４月から５月は好天の日が多かったことから、出芽後の生育は良好となり、移植作業及び活着は平年並みとなりました。その後も好天に恵まれ、茎数は平年並みとなりましたが、７～８月にかけて低温・寡照傾向により、出穂にばらつきが生じたほか、登熟がやや緩慢に推移しました。

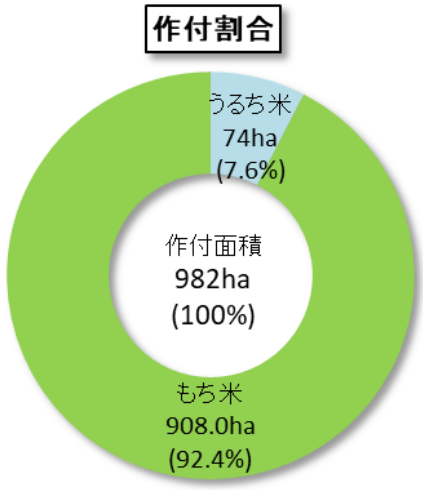
穂数、総籾数、稔実歩合は平年並みでしたが、千粒重は平年よりやや軽くなりました。オホーツク地区の作況指数は「109」の良となり、全道平均（104）を上回り、収穫量も 5,350 トンと前年から約 130 トン増加しました。

オホーツク地域の水稲の作付はもち米が主体であり、もち・うるちの割合は、令和元年産で、もち米が 92.4%、うるち米が 7.6%となりました。

管内のもち米の品種は、平成 21 年に北海道優良品種に認定された耐冷性に優れる「きたゆきもち」にほぼ全面的に切り替わり、品種別での生産量は道内一、もち米全体でも上川管内に次ぐ第２位の産地となっています。



資料：農林水産省「作物統計調査」



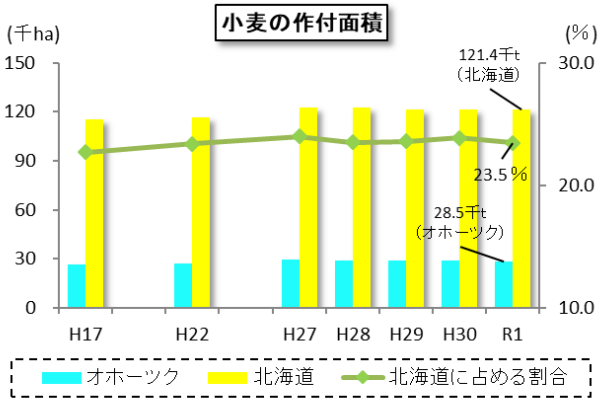
資料：北海道農政部調べ

２　畑　作

（１）麦類

小麦は、輪作体系上の基幹作物となっており、令和元年産の作付面積は 28,500ha と、ほぼ横ばいで推移しています。

令和元年産の生育は、４月以降、好天の日が多かったことから順調に推移し、収穫も平年より早



資料：農林水産省「作物統計調査」

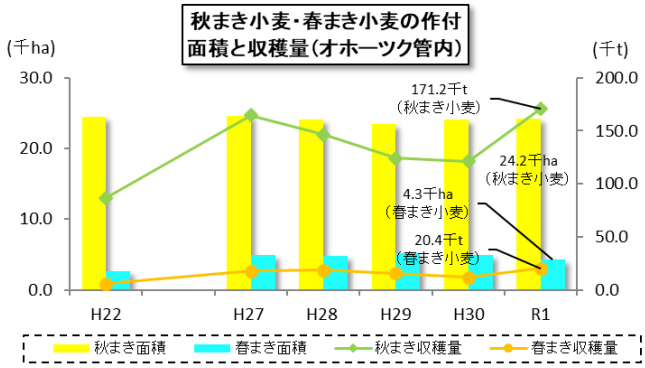
く終了しました。

秋まき小麦では一穂粒数は平年並で、千粒重は重く、穂数も多く平年を上回り、小麦全体では、10a当たりの収量は672kg、収穫量は191,700tとなりました。

○秋まき小麦

令和元年産の作付面積は24,200haとなり、前年に比べて100haの増加となりました。収穫量は171,200tと、前年に比べ50,200tの増収となりました。10a当たりの収量は708kgと全道平均（588kg）を上回り、前年の503kgを上回りました。

品種は日本めん用の「きたほなみ」が主であり、一部地域では超強力系小麦の「ゆめちから」なども作付けされています。



資料：農林水産省「作物統計調査」

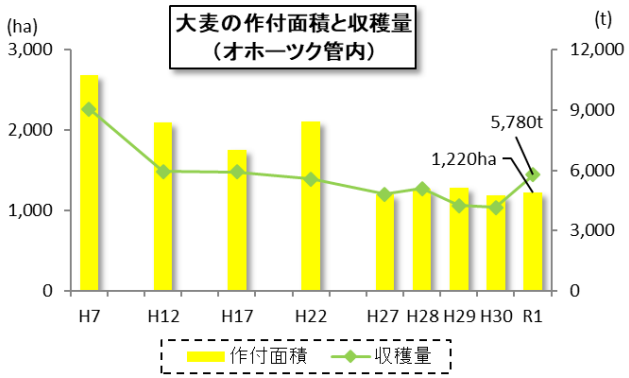
○春まき小麦

令和元年産の作付面積は4,340haで、前年に比べて580ha減少しました。収穫量は20,400tと、前年に比べ8,600tの増収となり、10a当たりの収量は471kgでした。品種はパン・中華めん用の「春よ恋」が主であり、北見地域及び斜網地域を中心に作付けされています。

○大麦

令和元年産の大麦の作付面積は1,220haと前年から30ha、収穫量は5,780トンと前年から1,640トン、それぞれ増加しました。10a当たり収量は473kgとなり、前年を上回りました。

管内では、ビールの原料となる二条大麦が作付けされており、ほぼ全量が契約栽培となっています。北海道全体の約7割がオホーツク管内で作付けされており、主な品種は「札育２号」となっています。



資料：農林水産省「作物統計調査」

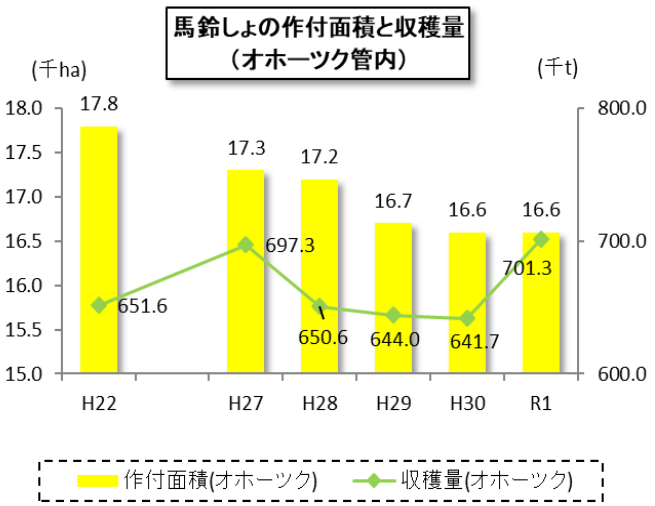
（２）馬鈴しょ

馬鈴しょ生産は、生産者の高齢化や経営規模の拡大に伴う労働力不足、他品目への作付転換等により、減少傾向にあります。

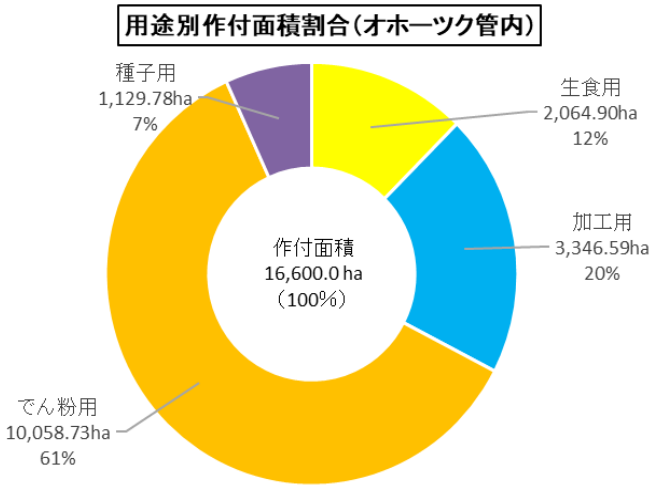
その中で管内の馬鈴しょは、令和元年産の全道の作付面積の約３割、収穫量の約４割を占めており、面積、収穫量ともに約４割を占める十勝地方に次いで、本道における主要な産地となっています。

令和元年産の作付面積は、前年並の 16,600ha となった一方、収穫量については、生育が順調に進んだことから 701,300t と、前年度から約６万ｔ増加しました。用途別に見ると、でん粉原料用の作付面積割合が高いことが管内の特徴で、令和元年産は全面積の約６割を占めています。

馬鈴しょの生産に重大な影響を与える害虫である「ジャガイモシストセンチュウ」は、管内では、昭和 52 年（1977 年）に初めて発生が確認され、その発生確認面積が拡大しています。馬鈴しょを安定的に供給していくためには、まん延防止を進めることが必要であり、近年は、でん粉原料用を中心にジャガイモシストセンチュウに対して抵抗性を有する品種の作付けが進み、管内では、「コナヒメ」や「コナユタカ」といった抵抗性品種の作付けが増加傾向にあります。

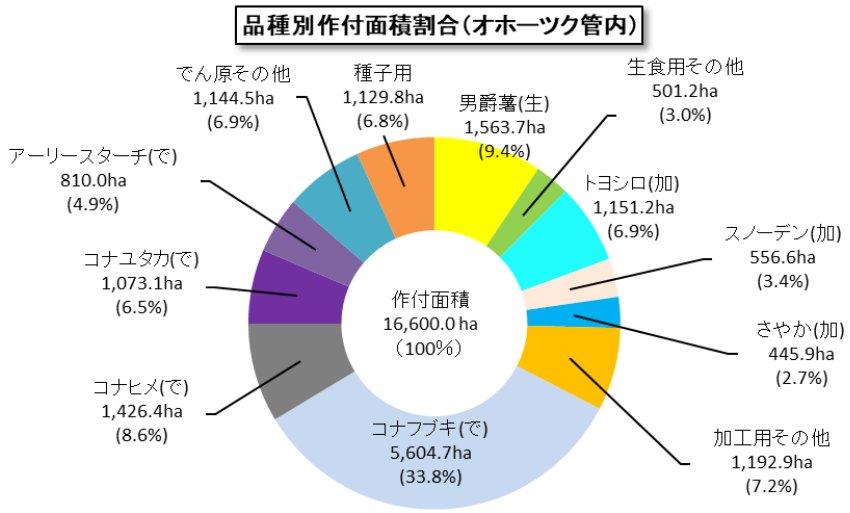


資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：北海道農政部生産振興局農産振興課調べ

注：主要品種（全道で 500ha 以上の品種）のみ集計



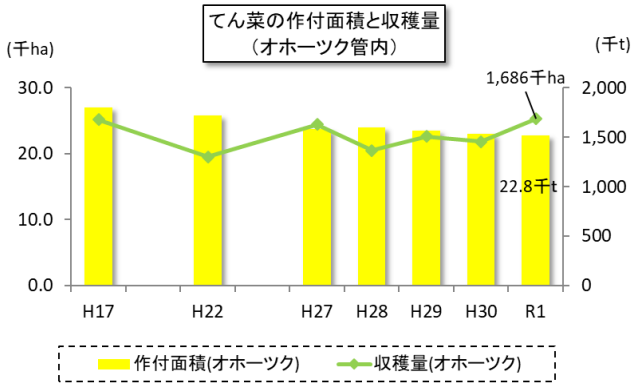
資料：北海道農政部生産振興局農産振興課調べ

注：主要品種（全道で 500ha 以上の品種）のみ集計

（生）：生食用、（加）：加工用、（で）：でん粉原料用

（３）てん菜

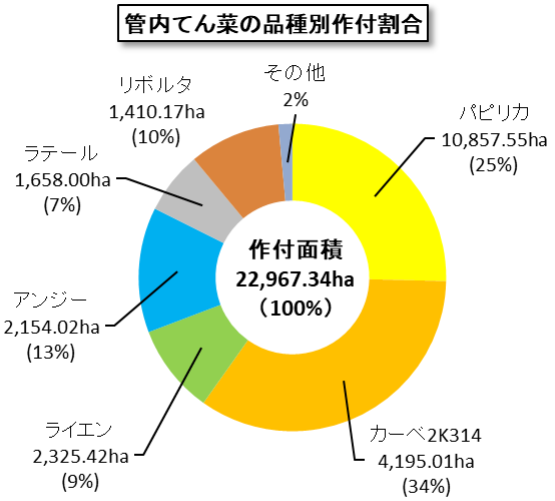
砂糖の原料となるてん菜は、畑作の基幹的な輪作作物となっており、令和元年産の作付面積は 22,800ha と前年に比べ 200ha 減少、収穫量は 169 万ｔと前年に比べ 23 万ｔの増収となりました。作付面積は全道の約４割で、十勝管内に次ぐ規模となっています。10a 当たり収量は 7,446kg/10a と前年に比べ 1,114kg/10 増加し、平均糖分については 17.0%と前年産より 0.1%減少しました。



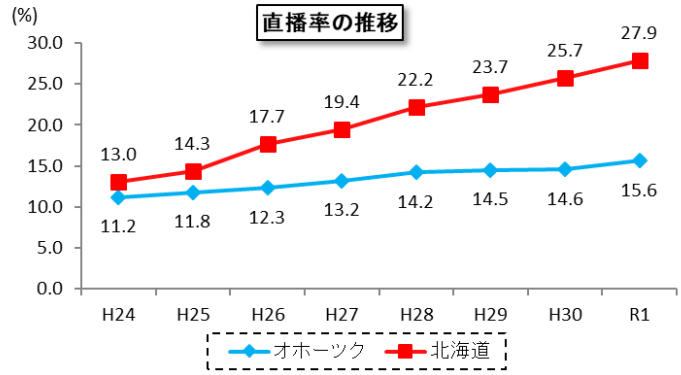
資料：農林水産省「作物統計」

品種は製糖工場の集荷区域によって異なりますが、高糖分・病害虫抵抗性の品種が広く作付されています。

てん菜の栽培方法のうち直播栽培については、移植栽培と比べて収量性が劣る一方、作業の軽減が図られる栽培方法であることから、経営規模の拡大、栽培技術の改良などにより徐々に面積が拡大しています。令和元年には管内のてん菜作付面積の 15.6%が直播栽培となっています。



資料：北海道農政部生産振興局農産振興課調べ。
品種別面積は作付統計調査と一致しない。



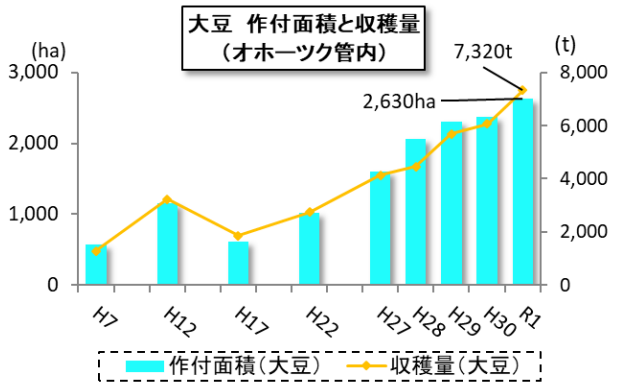
資料：北海道農政部生産振興局農産振興課調べ

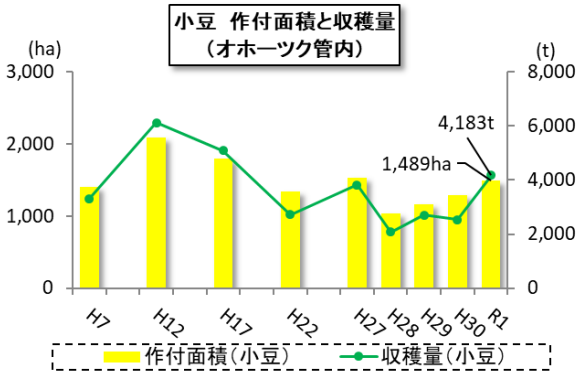
（４）豆類

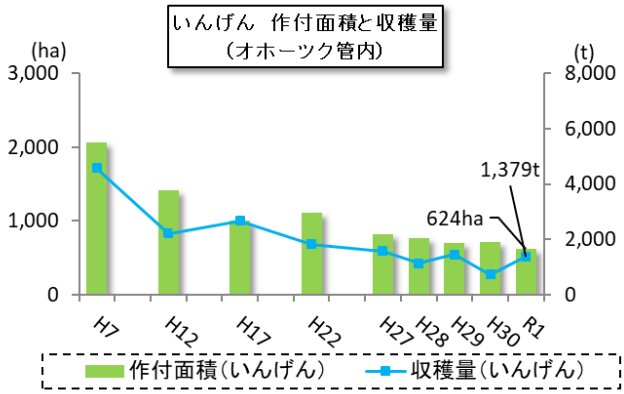
大豆を含む豆類は、適正な輪作体系を維持する上で重要な作物となっています。冷涼な気候のオホーツク管内では収量が不安定であったため、作柄が安定している小麦等に転換されてきましたが、管内に適した大豆品種が育成されたことなどにより作付は増えており、令和元年産の大豆の作付面積は約2,600ha、収穫量は約7,300トンとなっています。10a当たり収量は278kgと、全道平均（226kg）を上回っています。

小豆は作付面積や収穫量の変動が大きくなっていますが、平成28年以降は作付面積、収穫量ともに増加傾向にあり、令和元年産の作付面積は約1,489ha、収穫量は約4,183トンとなっています。

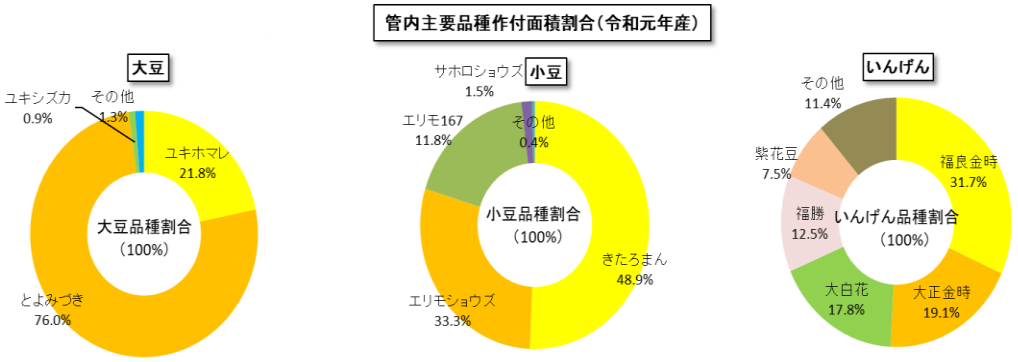
オホーツク管内におけるいんげんの作付面積は全道の約1割となっています。このうち、高級菜豆（花豆（大白花）など）は、主に北見市において生産されており、全道の作付面積の約65%を占め、全道一の産地となっています。







資料：大豆は農林水産省「作物統計調査」、小豆・いんげんは平成18年産までは「作物統計調査」、平成19年産以降はオホーツク総合振興局調べ



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

３　園　芸

（１）野菜

野菜類は、高収益作物として各地域で農業経営の中に取り入れられており、管内の令和元年産の作付面積は 10,373ha となっています。作付割合は、たまねぎなどの葉茎菜類が 73.2%、にんじんなどの根菜類が 14.6%、スイートコーンやかぼちゃなどの果菜類が 12.1%、メロンなどの果実的野菜類が 0.1%となっています。

品目別の作付面積は、管内の主要な作物であるたまねぎが最も多く 7,325ha と全体の 70.6%を占めており、次いでにんじん 1,137ha、スイートコーン 722ha、かぼちゃ 527ha となっています。

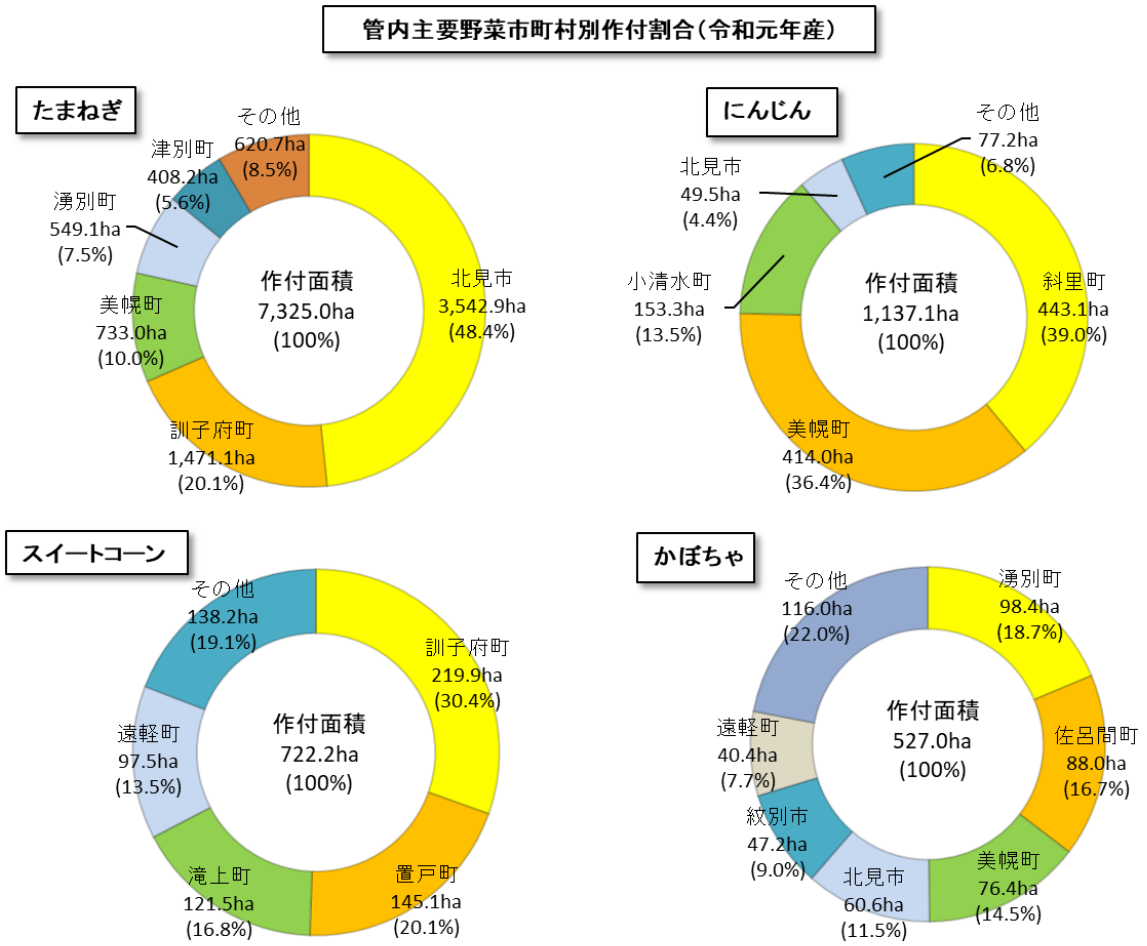
地域別の作付面積では、北見市、訓子府町などの北見地域ではたまねぎ、湧別町、佐呂間町などの遠紋地域ではかぼちゃ、斜里町、美幌町などの斜網地域ではにんじんが多く、地域の特性を活かした産地が形成されています。

管内野菜作付面積と収穫量

	作付面積 (ha)			収穫量(t)		
	H30	R1	前年比(%)	H30	R1	前年比(%)
たまねぎ	7,171.9	7,325.0	102.1	415,339.8	441,808.0	106.4
はくさい	30.4	28.2	92.8	1,857.4	1,586.2	85.4
キャベツ	59.3	60.9	102.7	3,269.0	2,941.0	90.0
アスパラガス	42.5	44.6	104.9	104.4	104.4	100.0
ブロッコリー	82.9	89.1	107.5	592.0	676.6	114.3
ほうれんそう	6.1	5.0	82.0	82.1	111.3	135.6
レタス	4.3	3.0	69.8	37.0	85.0	229.7
ねぎ	9.5	6.1	64.2	180.2	283.4	157.3
その他 1)	19.3	34.9	180.8	131.4	163.3	124.3
葉茎菜類計	7,426.2	7,596.8	102.3	421,593.3	447,759.2	106.2
スイートコーン	733.9	722.2	98.4	7,340.8	10,021.1	136.5
かぼちゃ	512.9	527.0	102.7	5,145.4	6,882.5	133.8
その他 2)	6.4	6.4	100.0	196.3	215.9	110.0
果菜類計	1,253.2	1,255.6	100.2	12,682.5	17,119.5	135.0
にんじん	1,102.0	1,137.1	103.2	41,139.6	47,137.9	114.6
だいこん	102.4	99.3	97.0	3,158.0	3,367.1	106.6
ごぼう	146.4	130.5	89.1	2,819.7	2,788.8	98.9
ながいも	141.8	133.9	94.4	2,270.2	2,317.7	102.1
かぶ	4.9	12.0	244.9	156.0	218.0	139.7
根菜類計	1,497.5	1,512.8	101.0	49,543.5	55,829.5	112.7
果実的野菜計 3)	9.8	8.1	82.7	181.0	209.9	116.0
その他野菜 4)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
野菜計	10,186.7	10,373.3	101.8	484,000.3	520,918.1	107.6

資料:北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

注 1)こまつな、にら、にんにく　2)トマト、ピーマン、さやいんげん、さやえんどう、えだまめ
3)いちご、スイカ、メロン　4)ゆりね

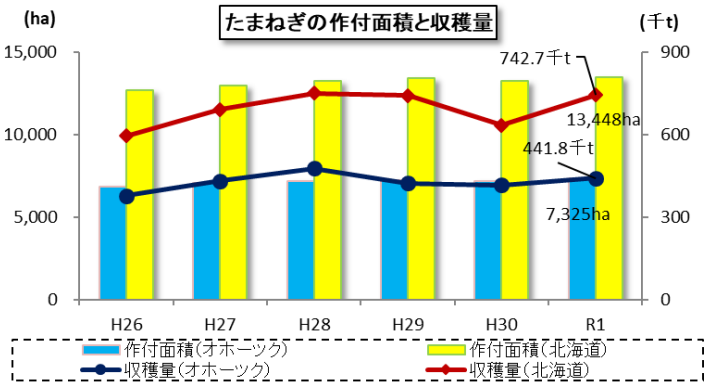


資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」
※四捨五入により合計値と内訳が一致しないことがある。

○　たまねぎ

管内のたまねぎの栽培は、昭和 40 年代に作業の機械化が確立して以降、収益性の高さから生産者の作付意欲が高まったことで作付面積は拡大し、全道の作付面積の約 54%を占め、全国一の産地となっています。

また、各産地ではより安定した生産を目指し、産地での一次加工による高付加価値化、実需者ニーズに対応した契約取引の推進や長期出荷の取組、集出荷体制の効率化など、さらなる産地強化に向けた取組が進められています。



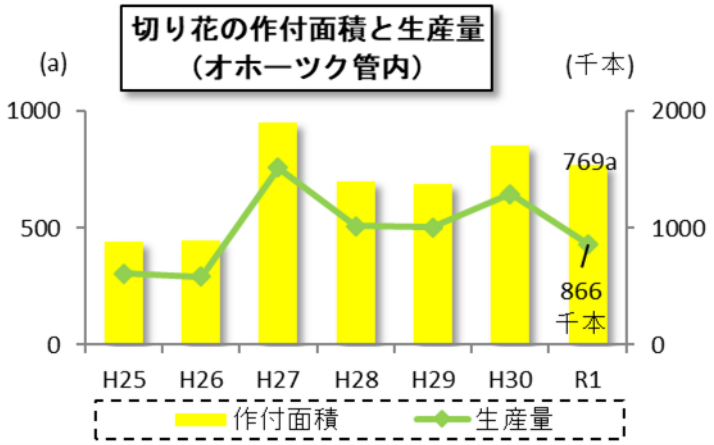
資料：北海道農政部　「主要野菜作付実態調査」

（２）花き

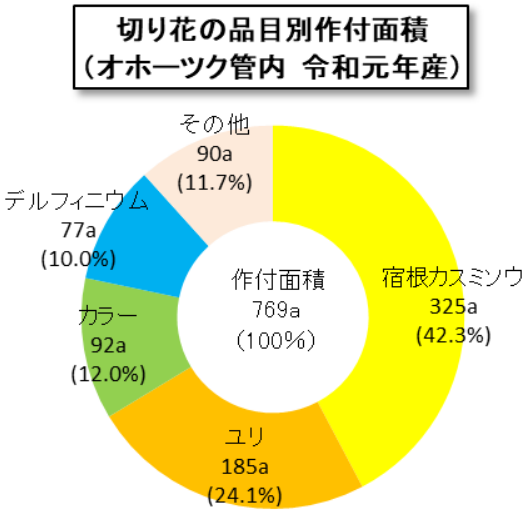
管内では、冷涼な気候を活かした花き生産が行われています。切り花の生産面積は大空町が管内の 58%を占めており、その他、小清水町、美幌町、斜里町、北見市、津別町、清里町でも生産されています、また、花木類も一部市町村で栽培が行われています。

令和元年の切り花の作付面積は 769a で、宿根カスミソウ、ユリ、カラー、デルフィニウムで管内の約９割を占めています。

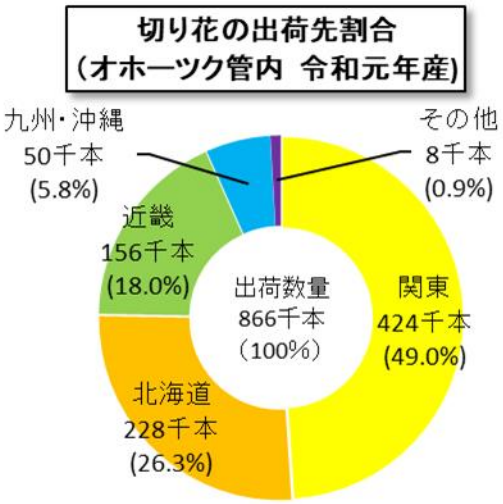
出荷先は、道内が 26.3%を占めており、道外については、関東圏に 49.0%、近畿圏に 18.0%、九州・沖縄圏に 5.8%、その他 0.9%となっています。



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ



資料:オホーツク総合振興局農務課調べ



資料:オホーツク総合振興局農務課調べ

（３）果樹

管内では、りんご、ぶどう、おうとう（さくらんぼ）などが栽培されており、主な生産地は、りんごは北見市、ぶどうは北見市や置戸町、おうとうは北見市や網走市となっています。

果樹園の中には、収穫体験ができる観光農園もあり、オホーツク管内における観光資源の一つとなっています。

（４）特用作物等

管内では、古くから冷涼な気候を活かし、青しそ、はっか、センキュウ、トウキなどの特用作物や、わさびだいこん（西洋わさび）など特色ある作物を栽培しています。

特用作物等の作付面積（令和元年、2ha以上）

品　目	作付面積(ha)	作付市町村
センキュウ	17.0	網走市
トウキ	2.5	網走市
しそ	103.4	北見市、佐呂間町、遠軽町
和種はっか	8.7	北見市、滝上町

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

開拓期から生産されているはっかは、昭和 10 年代には世界の 80%のシェアを占め、その後合成香料の登場などにより、作付面積は大きく減少しましたが、近年は、加工食品の原料としての需要が高まっています。

青しそは、香料メーカーとの契約により北見市や遠軽町で主に栽培されており、しそ油として出荷されています。センキュウ・トウキなどの薬用作物は、主に網走市で、生薬会社との契約栽培が行われているほか、わさびだいこんは、一部地域で栽培されており、網走市内の加工場に出荷されています。

Ⅵ　酪農・畜産

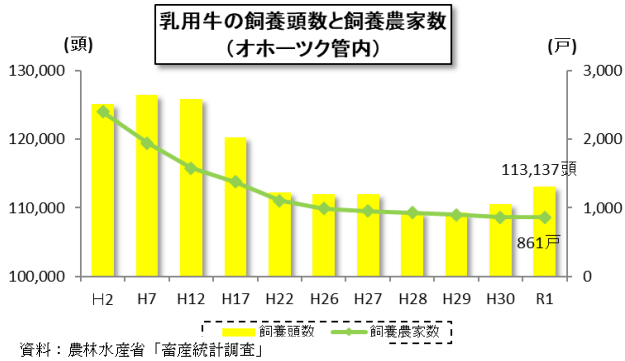
１ 酪 農

（１）乳用牛

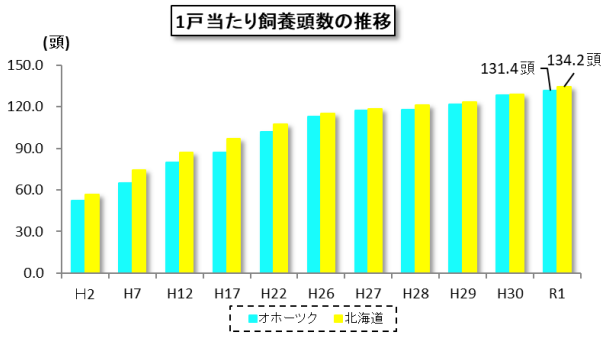
令和元年の管内の飼育戸数は 861 戸となり年々減少していますが、飼養頭数は 11 万 3,137 頭と近年増加しているため、１戸当たりの飼養頭数は年々増加し、規模拡大が進んでいます。

規模拡大に伴う労働過重や担い手の減少等の課題に対応するため、搾乳ロボットなどの省力化機械の導入、酪農ヘルパーやコントラクター、TMR センター、哺育・育成センター等の営農支援システムの整備を進めるなど、ゆとりある酪農経営を実現する取組がすすめられています。

特に、近年、搾乳ロボットは省力化の面から導入が進んでおり、令和２年２月現在 60 戸（道農政部調べ）で利用されています。



資料：農林水産省「畜産統計調査」
ただし、H22以降のオホーツクについては、オホーツク総合振興局農務課調べ

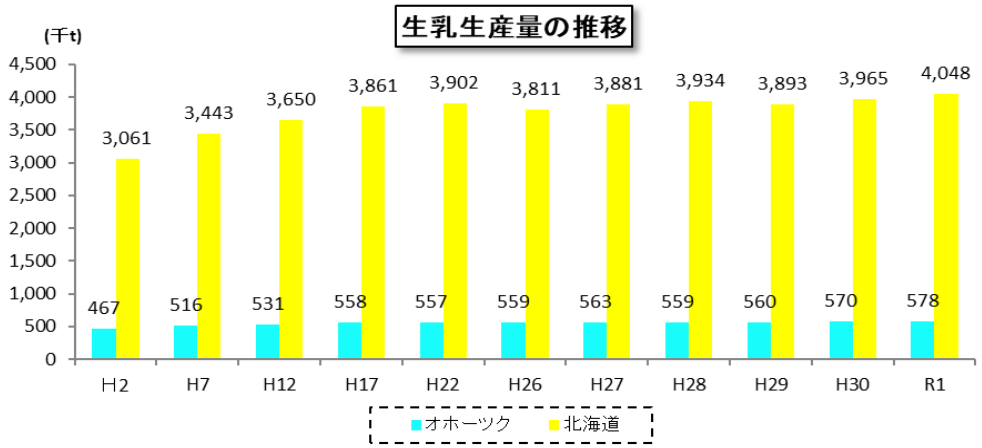


資料：農林水産省「畜産統計調査」
ただし、H22以降のオホーツクについては、オホーツク総合振興局農務課調べ

（２） 生乳

令和元年の管内の生乳生産量は、全道の 14.3%を占める 57 万 8,165t となり、前年対比では 101.5%となりました。

安全・安心な生乳を提供するため、生産者や農協、乳業メーカー等の関係者により、良質乳の生産に積極的に取り組んでおり、体細胞数や生菌数は低い水準を維持しています。



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計調査」
ただし、オホーツクについては、ホクレン北見支所の受託乳量